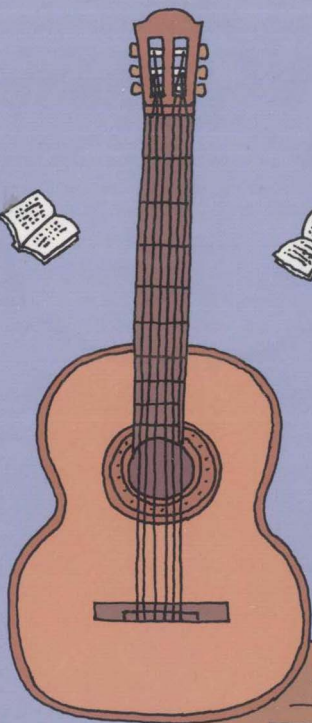


逢坂剛

さまざまな旅

わたしの好きな本・スペイン・西部劇



講談社
文庫



さまざまな^{たび}旅 わたしの^す好きな本^{ほん}・スペイン・^{せいぶげき}西部劇

おうさか ごう
逢坂 剛

© Go Osaka 1997



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1997年11月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

江苏工业学院图书馆

藏书章

さまざまの旅

わたしの好きな本・スペイン・西部劇

逢坂 剛

講談社

目次

イスパノフィロ

ホテル・レイナ・ビクトリア 13

ブルネーテの思い出 16

たった一人の聴衆 20

スペイン汽車旅行 23

カルメン万歳 26

なつかしのセビリヤ 30

キャパの嘘と真実 33

ゲルニカの意味 36

スペインを知る 39

ドウエンデを呼ぶギター 42

ドウエンデと辞書の話 45

ギター三昧 47

フラメンコ修業 50

現代の舞姫 53

ハポンのルーツを求めて 56

スペイン国王暗殺計画 61

スペインの年 64

クリステイナ・オヨスの至芸 67

カタルーニャはスペインか 72

食べる楽しみ、生きる楽しみ、それはスペイン人に聞くがよい 77

セビリャ万博開幕 79

黙して…… 82

スペイン熱の行方 85

スペイン映画 89

バルセロナ狂騒曲 92

カマロンの死 95

苦言を呈す 98

スペイン的な、あまりにスペイン的な

101

ギター文化館 105

津軽三味線、フラメンコを迎え撃つ 108

鷹とフラメンコ 112

聖なる山 115

アリババ人生

百人一首の楽しみ 123

どう読む？ 128

言葉あそび 131

玄界灘と雑煮の思い出 135

勝手にしやがれ 138

作家のへぼ将棋 141

頂門の一針 145

運のいい娘 147

わが家のガイドライン 153

娘の受験 156

卒業式 159

引っ越し 162

発泡スチロール 165

幻のウニ・イクラ井 168

ネズミ捕り 171

アリババ 174

見渡す海路果てもなく 177

受験時代 180

半信半疑 188

偉大なる田舎 191

超弩級西部劇 193

テレビ時代劇考 196

古い映画の話 200

喉から手 203

ライフルマン、ガンに死す

日本人の国際感覚 209

穏やかな挑戦 212

日本人は働きすぎか
215
凝り性の血筋
220

本の旅

小説舞台の国際化
ハメットの思い出
ヘルマンの実像
回想録の利用価値
よみがえる浪漫派
本を読む犬
ある献辞本
一九三〇年代の夢
神保町古書街散策
書店は世を映す鏡
シャビエルとカサノバ
作家になる条件

233
230 225
239 236
242
245
248 251 255
259
262

なつかしい本 265

カチンの森の謎 268

蔵書一代 272

怪紳士・保篠龍緒 275

ウェールズ日帰り旅行 285

『本のお口よごしですが』(書評) 288

『スペイン革命——全歴史』(書評) 291

『砂のクロニクル』(書評) 294

『幻のオリンピック』(書評) 296

『スペイン現代史』(書評) 299

『三たびの海峡』(書評) 302

『リヴィエラを撃て』(書評) 305

『ケストラー自伝・目に見えぬ文字』(書評) 308

あとがき 312

さまざま旅

わたしの好きな本・スペイン・西部劇

イスパノフィロ

ホテル・レイナ・ビクトリア

一年ほど前、スペイン南部アンダルシア地方の町、ロンダを訪れた。

ロンダはコルドバの南約二百キロ、マラガとヘレスを結ぶ線上に位置する、山間の小さな町である。あるいは村といった方がいいかもしれない。交通の便がもう一つなので、セビリヤやグラナダのようにツアーに組み込まれることは少ないが、日本人観光客はかなり多いという。

ロンダの特徴は、そのロケーションにある。町自体が高い山の上に築かれ、天然の要塞となしている。旧街区と新街区を三つの橋がつないでおり、古い順にローマ橋、アラブ橋、新橋と呼ばれる。新橋といっても、建造されてからすでに二百年を越え、歴史の古さを物語る。

これらの橋は、グアダレビン川の流れる深い谷にかかっており、先にあげた順に高さが増していく。ことに新橋は、谷底まで百メートルはあろうかという、目もくらむほどのしろものである。橋桁の内側には、かつて監獄があったという。崖の反対側から窓が見えるが、鉄

格子ははまっていけない。そこから逃げ出すことは不可能だからだろう。

わたしが泊まった《ホテル・レイナ・ビクトリア》は、この新橋から広い通りを数分のほった新街区にある。ロンダ唯一の四つ星ホテルで、お世辞にも近代的設備が整っているとはいえないが、ここの裏のベランダから眺める景色はまさに絶品だ。手すりのすぐ下は切り立った断崖で、グアダレビンの川筋が優雅なカーブを描きながら、広大な沃野をはるかかなたへ流れていくさまを、一望のもとに見渡すことができる。アルコス・デ・ラ・フロンテーラのパラドール（国民宿舎）もそうだが、こうした絶景を楽しめるホテルがスペインには数多くある。

わたしが泊まったときは、一カ月以上も続く悪天候のまっただ中で、雨まじりの強風が吹いていた。ちょうど日本の台風のような感じで、これほど長期にわたる悪天候は、スペインでも四十数年ぶりだと聞いた。あちこちで崖崩れが起き、交通が分断されていた。裏庭のベランダに立つと、下から吹き上げて来る猛烈な風で、体が浮き上がりそうになる。

そのベランダの一角に、ひっそりと銅像が立っている。そぼへ行つて台座の字を読むと、それは詩人のライナー・マリア・リルケの像だった。

実はリルケは、今世紀の初めロンダを訪れ、このホテルに数カ月滞在したことがあるのだ。それを後世に伝えるため、三階にリルケの記念室が残されているが、おりからの悪天候による雨漏りのため、修復中で見ることができなかった。

このホテルの落ち着いたたたずまいを見ると、リルケがここに長期逗留を決め込んで詩作にふけたのも、むべなるかなと思われるのである。

(90年12月)